發句帳

蕉翁部

伊地知文庫
文庫20
35
2

題

教句帳 裏部

伊地知氏書冊

文庫20
35
2

發句帳　夏部

題

更衣一　余花二　新樹三

若楓四　稗取五　橋六

乖花七　時鳥八　夏草九

夏月十　牡丹十一　牡若十二

蓼十三　十月　蔕蒲十四　早苗十五

青梅十六　五月雨十七　梅雨十八

伊地知氏書册

夏

更衣

一句、はふのゑのへにてやいつこ夏ごろもきみとぬうせやくふそめ夏ごろも　宗牧

一　櫂

二　鐸

三　百合叩

四　撓子

五　簾

六　若布

七　蛍

八　丸鶏

九　水室　六月

十　海松

十一　白雨

十二　未摘花

十三　麻

十四　撫子

十五　石斧

十六　蓮

十七　芍薬

十八　夕顔

十九　扇

二十　絽源氏

二十一　蛍

二十二　清水

二十三　夜

二十四　雛菱

扇 十九 紙原 十 象

佳の 十二 稜 十三 雜夏 十四

夜

更夜

新撰

○三句 はふの色のへたてやいつこ夜こころも
さみとぬりせやふふそめ夜まろも 宗牧 同

なをなをあるよあるとを花原に高くをを
武蔵野かへぬこころもやあの雲
せめて是つくてかへるこを花こを
けさを霞ら出れんを夜夜 紙
ほくを安坂雲のをこをぬこを
山路のをもをみをやをこを 〃
輝のをやをを風をを夜を 頃
それをやひをくをを夜夜 稜
面影をそれたをを花をを 匹
夜をををををぬんを記念を 〃
ゆををををををををを夜 〃

うらうらとちるも花のわかれ哉　卯

余花

花乃こゝろ卯月は後の三月に　卯

春ところぬひつまや花咲とと様

花咲志さい野菊いつ花薫

花咲るわか香いつこ花書本

わかそより花おとす家かな

うつりそまよそみその春花　瓢

花ゆくゆり一葉の花もる

花よりのこ春としくし篠

花の本とこれ子入の花香本

いとこん花のの散花もみち

うれのわい花をうへし花哉　柏

風情しものちりさへつれ花　碩

花よられ花へけるも柳哉

雲れ本花花の花香　牧

[illegible] 頃

[illegible] 牧

[illegible] 柏

[illegible] 〃

[illegible] 〃

[illegible] 〃

[illegible] 〃

[illegible] 〃

[illegible] 〃

[illegible] 〃

[illegible] 〃

[illegible] 〃

[illegible] 〃

[illegible] 〃

平賀教信真行

昌休

花乃ちるてゝめ〜ちるやあつ衣

沼田平井ゝ来つ研殿して

ゆくとしの葉行てゆくやちつ衣同

さてゝちる乃さりもてゝふやちつ衣同

ましこ河くまやなからん春の塵 〃

平野数信真行

前出
花の色しをれしうつるや哀 体

江州平井右衛門尉殿

同
身にはわかれて春の名残やおも哀 〃

ゝ
河しほ色の河のとをやま吉 〃

鶯かよふわかれて花の名残かな 〃
昌休

花ハ山桜けふみつ山や春 〃

かせや花をけハちりくる春立 粮

とはいふ花ハ入花の雪 〃

花のさきみさそうへの春の夜 〃

花のまちそよふよふの花の下 〃

みやこの内へ動かす出る月わかれ 巴

又し花のゆふ庵にわかは 〃

志けきをなの山の榊生の庵の庵 〃

そらに雨わかれてをとの花の露 〃

花の名ハいとまん風の吹くる哉 〃

花なきはつとたうえの花さかり 一
花のまへ毎ことにちるはなや下 〃
みるの内毎起まて出る日わらべかな 巴
見し花は此の里庵とわすれけり 一
志けりあふ紙里川ら桐生は竜の庵 〃
さそふ雨わすれはてたるつゝの花ぞ 〃
花の中いとも風のわすれ草 〃
起しうき昨日の花わする花の頃 〃
さく山は春のあとを花の内はしら 〃
去る花や人を花にみ花は暮ぬ 〃
大嶽やいろふも雨をとくるさくら 〃
言ふ山や机にまて見る花に河 〃
都つ花の信あこそ
花さくとわすれ見ゆや山桜 吃
花は□すわすれて机ぬあるかな 彻
新樹
夜家もまし秋のさくらぬここ山の柳 殺
秋にてもさこともむかしわするかな 〃

志けまさしぬ神代の代の阿
筆さきうこ廣屋さうの指南
文と枝さいうこわうとも灣地須
志きうあはこ世まある鎌倉威
志けあ寺こ廣ふ寺の社と世れ伽
島やもし指のこ志けうこと志れ
竹林こ天人
花のえとうくなりうものか文朱三
成らものこ成これし朱百ふ
雨ともまこ志ふ紀桐ふ志ふ
あめうこあ新こ色ふう花こふ
志けふ志ふ杉ふう一朱ふ
朱のもこう志うの朱三ふ
新こあ本朱は志ふ代色ふ祇
山あ井ふ代ふ志ふ志ふ新ふ
廣信一わうこ新の河さうこ
枝こ成杉こ志ける本のこ新
石河國こ

庭清しわかき緑の陰きよく
枝も我もとをきしける木のもとかな

近江國ゝゝ

風はらふすたれや千枝おもかけ
志賀の本をみるや下葉も春秋
いとたえてまとひて風る柳かな
志けるのもとをはし志るぬ深武
若たけのうへ〔う〕の糸の曳く事雲ぞ　柳
我か井の朝露すかたはかれ
年毎に手折ぬ人もあらし春を
いくむすと山はわかえ錦かな
深山路の志けみもつゝむ霞かな

山城ゝゝ

青柳し川わせお〔お〕もえに柳かな

[illegible] 紙
本ね紙のこれをひとりのもの 〃
わたくしあつてれ一両のうちとれるもの 〃
ふるものね紙ね屋とそさき屋とみち 〃
老とてよ諫むるとりれる業 桂
心しる記とたとこれわるてよ 〃
長代あるとね紙のつねのみる十人もの 〃
とそやこのこのうちれ業 〃

威淡院さんへ

霧のいろいろ世をまのあるとね 休
霧もみる紙のもとあのわるとよ 〃
所わ合てとそ紀ね木ものあとる 養
見とうとそもうて山業ね紙 〃
激れのや唐藍とのかの間ね 〃

[illegible] 四
常盤ものの系図 〃
色てしみんとそれ林わるとの紙

霧もみぢ枝のしぐれの十のたひ 〃
霧の合ひとつ紅の木の間より色をみる
まつもみぢたちにし山の峯の松 一 蒼
瀧水ぬや唐藍とそのかほ思ひ 〃

こゝの山常にしくれてきにし山 〃
常盤木も紅葉すゝめる錦かな 〃
色かへぬみどりの林つゝむ秋 巴
秋の花咲をときつゝねはるかな 一
夕蝉ぬれしくれなみた白露の 一
水ととみ志れる本来の思ひかな 〃
落葉せし跡も見え山や夕暮 〃
こゝろさへやすらふ水の流かな 〃
とりとまる木の花にわすれぬ匂ひかな 〃
うこくぬやまたも所のほかの夕暮 〃
とりの風の夜まてすそ外面かな 〃
秋やわかむ吉原笹の葉の露 一
志けるなか志川ちや瀧のつゆ 〃
枯野もの中枯ハ志け内になる花 〃

一ことゝも志けるゝ人むつ戸玉柳
松の色ぞ[illegible]
所ちゝ志ゝて[illegible]
風ふかねば柳あるさ[illegible]
あさ所白ちゝ[illegible]
志けるゝひゝて[illegible]
海中ゝ志ゝ木高き柳成
一ゝとゝ志けるゝ[illegible]
一本ゝ二本ゝ志ゝ柳[illegible]
常盤木[illegible]
木枯のゝ見ゝ[illegible]
[illegible]
志ゝ合て[illegible]
根ゝいゝ[illegible]

参ゝけるゝ志ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]

原村のうつり見をんなを[illegible]
高ゆきよりあとなる村のうつり見
志ゆの人をてしたりさなるあ[illegible]
相ゆいうも高ゆきみうつり見の時遊

今ゆけ高ゆきもちやうをよ本遊
とゆをあ高ゆ屋ゆ屋方乃枝
文をしゆ明り心のわつ高見
高ゆをゆ樹をひとつ枝ゆ
志ゆをゆ本ゆ高ゆ[illegible]ゆ洞の水
秋のうつをあ高ゆ深ゆとり
ちうをゆ松の高ゆうつ高ゆ
うゆかゆ志ゆ本ゆさ柳風
知りゆ高ゆ屋ゆ高ゆ風
酒ゆをひゆ色ゆるわつ高ゆ
見ゆ高ゆ山ゆちゆ高ゆ志ゆ

二月廿日ゆ高上星見屋張守
延長ゆ

病ゆて秋ゆ本ゆ資ゆ

始りしことなるべし

近吾

神のうへの家もわるくなりぬれば心
馬杖もとまりしかば生涯の邪
志ゆかんの所為なれば本立
志ゆかんとひとしくなりぬ
松人にとりて年たんせち
とをもひけれ参拝しかやる事
家志くれば如何ともなし
一すとも本校を無けれ
ことをすめ所雲間なんこと
事ゆえ所より絶こめるの家り成
天ゆうにて本校を建
常導事を成ゆえ事成

去仍

小野今年
松原の志ありまた本能 仍
二村勝二区新造の答り

こえすの峰雲間やとほくみえそめて

あきこゑ外よ絶えこゑよその紅葉哉

天くたるよそ之枝の大内山

常盤木も色ふかくそむる紅葉哉

玄仍

小野会席にて

松原の志らかはかけて紅葉かな　紹

二村勝三郎新道の会より

あらしたに折もこそへおもふ紅葉哉

わか葉かなそのいろみせよ桜狩

於信州高遠城

あらし谷あさしけりよ友垣

若楓

たちゆくもひさつゆるしの若楓　祇

あをばのみもえ出るよりいろ若楓

ちらぬまてこそ会より

秋色の露八しほの紅かわかの楓

ひさつゆくさえこ紀ちゝゆかの楓

肖柏

あをやぎの糸すつるとわの枝　休
下ゆくすゑはしらかいて　祇

梅取

香をいとふ春をてをしの金殿　〃
神垂るるまつりなりひく梅うる　祇
ひとをとるとしやもむかし　〃
ひとをとる月にひとさのまする鏡　〃
ちりをはらふ袖ぞ　牧

橘

立花乃見わたすかぎりなむ巻の百
新撰
たちばなの梅ちるつぼ見わたれ
立春乃花の香たちそこそ
竹
橘をたちばなとは花
壁
梅ちるとはなのさかりの

橘をたちばなとは花
こうこの花の香よりほかのこと　祇
なのもとの名考れ

たらちねは梅[illegible]ひかれ
五月雨や花の香ちら[illegible]
竹
橘のにほひ[illegible]
壁
梅[illegible]のさくら

橘の香[illegible]しき[illegible] 祇
ここの花の露より月やむの[illegible]
その名をへてれ[illegible]の名香れ
橘はいとうらえし恋の名寄
ひとつわかれやたらむ玉ちれ
タチハナ
梅[illegible]夜[illegible]
立ちれ霜[illegible]
すまし社家して
立花[illegible]
橘[illegible]月[illegible] 柏
[illegible]花の[illegible]
仁人の[illegible]
[illegible] ね
たらちねは[illegible]

梅と浅瀬にかほりをうつす井の水 〃
こゝろなき花にふきけり匂ひ来ぬ 〃
なつかしき人の袖かも匂ひ哉 〃
こゝろ有りし人をおもへは匂ひ来れ 〃
忘れし色よりしゆ花の梢哉 桂
花よみよ梅は花の世の昔 〃
香とみぬ香りは匂ふ花に宿 〃
なつかしき香こそ古今の軒の端 休
下句之良居直し
橘乃花のかほりか匂ひ来ぬ 〃
こゝろ有れの夕月や山つき袖の裏 養
なつかしき花の香をとをしき匂ひ哉 〃
身にかけて枝ともかけき花の匂ひ哉 巴
橘の花もひとつの袖ぞむかし哉 〃
こゝろよりかくて世にあらは 〃

卯花 七

竹林
卯の花は雪とみまさう高根や去年の雪 敦

たち花の花とそいとしたしかれ
あしけるかとそ花けきそ花の側れ已
橘のうひうのこそもむすれ

三月廿七日

郭花

竹林

郭のそとそ花きそ高砂や去年雪敷
うの花の月うそきつ浮きそ郭蔭
織て仕守麻をうそ霞れそ花り郭仰

新撰

郭のそ花はけよ郭はしきの
うれそ月の里の屋花宮
うつきそ里の屋つきの月うそ流
うの花敷あそ花の郭の花郭

なそ郭そ郭とそ郭もの郭そ郭

図

郭のそれの郭花けの郭そ屋郭
うのそれの月きの屋花郭
さそもそうの月さそもの月
郭のそれ山けきそ郭月郭

卯

卯花よりこそ山路をたとりなん
（壁）こゝろさとく卯花ゆへつらき宿さき
かきねくらき卯花月に霞しくらく
祇
うの花の月にゆくてはくもりけり
うれ花は月の夜みえつゝ庵哉
卯花はさる山かげのかさの一重かさ
卯の花のかきねにや雪をひとへに
紀
くもりなき雪に花のかゝる小草哉
くるゝまで卯花の影に秋外面の松
うれ花を見えつゝ夜あさき宿哉
うのはなれしの木下にあかく山路哉
ひらけるき洞（奇）もさながら行かくる哉
雪は散あさき露すくし花ちりさき
うの花やけさいさよひの影そ月

うつろふ卯花月のあさくなき
ゆきちかひぬれ袖もぬれ花の宿かな
うれ花の浮かきくうへに雪かへる

ひとりゐき洞もとのうつ柴 〃
雪を敬あさ霜すとし花うつさ 〃
うのもやけさいとよひの秋の方 〃

うつろふ月のあきのよを 〃
ちきりひしぬわすれぬ花のうつろ 〃
うれ花の落ちきうへうきうへ五 〃
冬とりつゝあのもゝ柏こうきつゝ 〃
うれもやしこうきけ 〃
かもやまきき秋月 柏
うれもをけさかつ 頃
うのそれ、春をまうむなれ 牡 〃
つもをもあむものかくこゝる 〃
かもやなをけうきつゝ 〃
本面ちきつうつ 〃
かを、中をの春花外面花 桂
月おちて雪うちもうの本 梅
ちもあ花をうの花かうゝ 〃

[illegible]はなとたとへ　一
うのそれのつのやうに　〃
雨間とも月やうの　〃
うのそれやうれ　〃
和のむらなとせかうタクれ　〃
うなるの雪とも　〃
うのそるやうに　〃
時鳥　八

世をうしろうとうね鳥を時鳥　歌
用とこうもの　〃
竹　花とのなのうの　〃
祈ことも　〃
うちをもかうこと　〃
用とこうもの　〃

子歌とうの根りの　出歌　和
蓮　春の間乃雲の　〃
こうとうとうとうの　〃

猶うしとやまきはなれん時雨　〃
ころもかせ山中ならしもみちさす　御
閑しさそふつきてうしめつらしき　秋風　〃

子規音を根にかよふ　山家秋夜　御
慈
高根の間乃雲のうへまつ郭公
こゝゑをとらハ限寸時雨
待よしとたるてやなかん郭公
ゆくれく月をてるのむ伊勢寺
啼けしきまつとをまちて時雨
あけてこそなるものとかくれ郭公
月のかけめくりあふよの時雨
たのむをよ十声一念ほとゝきす
まてハこそあかぬ月もなき郭公
雲をしてあハれをかけし郭公
子規なかぬるこゑをめつらしき
新撰竹林ニモ入
山ひこの答を峰と山寺
をとることすむもまかせける深山かれ

竹林三ヶ入

[illegible]

中れくなく春色をそなへ
たる人くこそ郭公
聞つるとそ也くつまなりける歌

聞くこそ今こそ義茂や宿れ月
きくこそしかうてぬる郭公
月後けさいとこそ思ふ時ぬる
又やなりんこそすうれも郭公
かくこそ今は振り上ぬ
色りもせちこそ人のかすす
待こそ〳〵やすらはれつてる郭公
かくこそ今は此もかはる深山
たれ世人とのこそさてて郭公
聞れしとそれぞ人ちしる歌
ちてそ此中こそ郭公
是也ぬ事ぬ所に住て
けるぬ振り上ぬ
年月それのこそ郭公

祇

ちまたの三郎とうたまはる
初めてかたらひすまひ
四方の神ちかひ
をもちて山いつかたをも
歎きとらのいろかたをも
あはれみや時をたがへ
まれ人ぞつくもの郎
待人とうたまはて
いつくしきかたの郎
聖ぞ走る人しまの
名をもかくしてはの
まれ人しかるをかの
まして神ぞ霊
をたまはぬ郎

出あひ月思ひぬ
をとこを殺さいや郎
ちまたの國まて

月人壮士の名をかりて
まことしやかに霍公
なきてあるべき郭公
思ひあまりて時鳥
なきてあるべき郭公

そもそもの國土にて
こゝ千年郭公
なれまつ里わけ行
こゝわけなれとひおとしたる郭公
おなじこゑなれはなれ
まことの心をもとめ出す歌
まことに聞しかは此
とわもなかぬこゑなる時
人情をもて一年ほとゝぎす
こゝに人一色にかたせ
山とゆく人情をかたる
時こゝに京にあつまる郭公

郭公ほとゝぎす
時のとゝしてくさん郭公
郭公すてとめむとつゝれ
郭公ほとゝぎす雲井の地ゝ郭
郭公のゝわ神ゝ木ゝ
一色ゝ
一色やひとみのゝ
二変ゝ
ゝ郭公
月ゝ
ゝ郭公
ゝ
ゝ
ゝ
天満宮
ゝ
ゝ

播州ゝ
ゝ
伯耆国ゝ

わかるまてきうの乃ゆ時
天満宮れ給う
かくまてすうの事
〃

播州たつの乃れ山の事
かくまてうかれ山ゆれ
〃
伯耆国しまて
〃
きうれ山ゆ志のほ乃
〃
きうれ山乃ゆ
〃
きうれ山ゆ木すゑれ時
〃
郭公聞ゆ
〃
桜河の坊まて
〃
きうれ八幡山ゆ郭公
〃
郭公ゆ
〃
わうすゑ乃ゆ
〃
ゆうれ
〃
郭公ゆ
〃
あ乃ゆ
〃

よもの海の高しほさい
吉野とくらとくらとと
小野の社今ハ

うち名に雲井の年を重ねて
松高みとて
用ひ来しものを雲井に
なの海名をうしろ高しなる
吉野とて名と吉野
小野の社今の乃木野の中
て後倉ヶ丘にて
ゆかしかりしなを
名号の連歌に
名を記念雲かれしなる
あるを古古歌人の
古歌をきゝ人と
伝聞を古色
きすてゝ古色の
志人と山桜
とゝ国に思立し
いそれなりとゝ

[illegible]

小國[illegible]

[illegible]

[illegible]

同乃ごとく拾ヶ所ニ付
拾ヶ所ニ付
拾人ニ付
拾ヶ所ニ付
拾ヶ所ニ付
拾ヶ所

泊瀬寺にて

二月廿日せきてあるとき

庵室山の寺にて

山とやゝ雲のやとりもはるるに

山家にはるゝ時和漢

うたれ山路にとれる郭公

鶯は春の連歌に侍よ

なを人人うちとりもとれる郭公

みやきんきうもうかせて時鳥

きゝうのおのゝ郭公

かへれやこゝあるとしらし時鳥 頂

山ひこに聲ちらすかやかとまて

おもとも見れ角に古き色はなし

郭公ちりかゝる時新とは

我をとる我のこゝはるまて

千歳ふる松の色元の松ちかなし

山上一西彩載一首の詠ふ

山ひこ[illegible]や[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月村追善

けさるかぜのあしたのあさぼらけ

春をしらせるひとの歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雲かくれ松ばかりなる月の色
月やいとゝあはれとなるまで雲ちかく
作るやいなや山の根かたきす
月村雨
玉ゝ紙れ
雪ちかし
雪ちかし
雪ちかし

成田左色

一刀ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

近長

[illegible]

永正元年

[illegible]

月二[illegible]

[illegible]

[illegible]

山ものぼるとはれば
まつとをぬるや
一夜ゝ月やとゝまれた
あめ
あめくもりゝ雨月の
雲をあ
雨やとゝ夜はあけぬ
明ぬとこえしゝ
行れしも
一夜やちりひらけ
伯州大山にて
いかゝ
張
郭
郭
月
雲

なりやいつ迄去年と御光の歌 〃

遅れ

ことつてん会とうをゐ時雨 〃

月

あらしの雨もはらはぬ時雨 〃

月

ふるさとの雨はなくてふる雨 〃

時雨すぬ雲もはらはぬ雨 〃

一雲やうらはらはぬ雨 〃

なりとそうらも雨入雨 〃

月雨すぬ雲入雨 〃

山とも成まつ雨時雨 〃

時雨ふるいさもしらとて雨 〃

一雲や月とそふる雨 〃

あひそのひぬ雨雲れ雨 〃

時雨すぬ雲はらはぬ雨 〃

いさもとそうへや雨 〃

山とり後まで残る色はさすが
ほとゝぎすいまだとゝけ鶯の
一声ゆ月とゝすむ有さま
あかつきのひぬ前に花の親
ほとゝぎす雲ゐのかなたよ我おもふ
いさもとそう人ゆ出る郭公
月ゆゑ月をまつ夏の夜
むし鳴ゆ時雨あとの
月とまつ人ゆ出る親
人つゝゆあるゝ山の夏
郭公なをやとゝ
つまとめの林うさ
ぬる人のやとゝ郭公
草ゆ庵ゆ人ゝ夏の
行ゆ出てゝ
ゝゝ月ゆ雲井ゆ郭公
ゝ乃在有

もしかなしかりしかの歌
月やあらぬ春や昔の春ならぬ
わが身ひとつはもとの身にして
人はいさ心も知らずふるさと
花は春を忘れぬ
かたらへば山ほとゝぎす
何ぞ
霍公鳥
郭公
十二廻遊善
今年毎
月みる
天つ乙女
つまとあそぶ
月かげ

[illegible]

十二廻返善

今年毎月[illegible]

天[illegible]

つまこあてあり[illegible]

出かけ[illegible]

餞別

[illegible]

[illegible]

返善

つ[illegible]

[illegible]

紙巴返善

[illegible]

[illegible]

宿[illegible]

紙巴返善

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏草 九

竹 [illegible] 嚴

苑 [illegible]

[illegible]

新撰 [illegible]

[illegible]

[illegible] 池の水茎

さゝの井の外い[illegible]

[illegible]（草の枝

[illegible]の[illegible]

張

東へ思立し　小野花谷

月次連哥

[illegible]

さこの外にハ百野ことに
百野りとて百野（草の枝の
百ゑさを小紅さうの本の枝　張

東へ思ふ一日小野に参
月次連哥
人々と道をむしたる百草
むらのかとの道ハ笹の葉
毎の葉ハ笹のうちに大野の原　頃
百くさにちうきの本の百野に　牧
旅人の袖の江楽
道ハ行ものの切色都の都　休
なれ葉の月ハ行ものの紅葉　張
百草の男鹿ハ色ハ笹　四
人々草ハ水の二手根　一
山路て野となれ木葉　一
年ぬとしとも百草　一
百草ハ物の花　一

[illegible]
[illegible]
[illegible]

たんしきれて本来在 〃
三乃位みすてゝ色さそ為乳 〃
緑色遠色

立月

范 水をたゝさ月をたゝてこそ国 〃
新撰竹林モ つき細し樓高かすん 〃
更てみぬ先もしすし夕月な 〃
竹 明やもとをたゝれする夏長 〃
国 立の秋月ふけ立あり武 〃
めてゝ行ぬ月をみ花の立花元 〃
明やもとをたゝ出し夕月秋 〃
紙
紙てゝ立ぬ月をたゝ秋出の月 〃
前出 立のたゝ人乃月みたる武 〃
立の秋たゝ月をたゝ天の川 〃

月

〃

〃

〃

月はけさ雲の底にうつる桂かな　〃
夏衣きて涼しき月の雫かな　〃
うすく霜とうしろ見ぬ月の影　〃
たなびくや月を横雲の松の枝　柳
あらつ野や月さうしうたる雲の間　頃
ちるや河月ふる雲の松の色　〃

お高路新年吟

海やうつる新年の月　〃
雲やうつる本の間天うつる月色　〃
又一年の月みしや滝の糸　牧
梅ちる本の間月色も雲武　〃
雲の新月色はうつる山色　〃
雲の春の月やうれかる春河　〃
月の中に桂を雲のうつもな　〃
月はけさむとそうつる海原春　〃
又ちるとうれて月色もうれる　〃
初て入るとも月はなつ雲　〃
雲の月ひとり雲の雪春　〃

周桂

[illegible]　桂

月さやかなる時　〃

月きけば悔のたつる哉　〃

夜の秋は月ぞ恋しの玉づさ　〃

月ちぎりかの玉づさ　〃

昔をも月ぞ言ふ哉　〃

元州に孝頃無用

夜の秋を恋ひあけぬ月見ぬ　昌休

夜の秋は月ぞ朝ぎり　〃

ちぎりの月ぞ水鳥　〃

秋ぞ月ぞ鷹なる玉づさ　〃

夜刈の苦へて月乃ぞ　張

夜の秋は月を恋ひ世の如ぞ　〃

夕月と秋ぞ哀れ　〃

[illegible]　巴

月ぞ秋ぞ[illegible]の風　〃

夜の秋を時ぞ月の引き　〃

夜刈の音へて月乃こゑ　張

夜の秋は月をあはれの世のかなしさ　〃

夕月よとおもふ哀は見　〃

義をもつかうまつらせて春　巴

月かめ行義をもあはれのあはれの風　〃

夜の秋を時をもくる月の月秋の月　〃

待月をも雲をも秋のく夜乃月　〃

八聖なくこゑと一こゑ裏は月　〃

夜はもの月くもりの夢こゑ　〃

行源し月のうへ　〃

ひの高ふきこゑ夜月　〃

月源しをもは清きいとをもの　〃

夜の秋の月やまこゑ秋は月　〃

月をもふもの源一稲の秋　〃

月のうへふ入をもこゑ秋のを　〃

行義を歌をもの本はまの秋の月　〃

めくらをもとをもの夜はの月　〃

雖も夜の月とも人あ海
いそ不も月やとの〇夜のそ
海しものすそ夜ことの月秋
夜ハいか雲海をとそく春月
月行て杉ケ月中ま河ま孔
夜おの月や色ゆく人こら
せめこ中しあるとこ夜月
ちこ中や年とおしこの月
月しう杉ケれこ月ぬ月
いこ行と海ま月の上海武
ゆこ中おこみしま夜の月
入ケ一の杉海一夜中月
海一こ中月こ中や夜海こ孔
時宜ケ月色こ中ま中ま

中ま中ま月や海一夜の雲
つ月と月六月の春宜宜
夜八月入こ中ま海色海

入江一所秋深一夜半月　〃
深一さを月さえやとる浦こゑ　〃
時雨さそ月をさそうてある夢　〃
中ふかうとはや海一帆夜の雲　〃
つゆを月五月の雨の春曙　〃
五六月入くるかとうの山色深　七
春とおもう老の月の新人　〃
夏の秋の月やうやの秋の朝わろ　〃
すくふの道あるの月の夏の夏　〃

追善

おもふ思ふ人人やなりつのよの腹　〃
夏の月のとしのうやの夏の秋の月　仍

紅巴追善

なみの月ありさの月を行くらを色　〃

如水追善

ひとをもとてうの月見も春月　〃

お波阜

みちのくの月代ちかくなりぬ

牡丹

十一

家の花ぞのにうゑし牡丹草　牧

家をこそ花やなりの深草　〃

春ごとに花やなりぬる牡丹草　〃

けふとをとちるやなりぬる牡丹草　宗養

赤日のあまてらすやわがとわれぬる　〃

春のまつりの朝顔の花ぞ　巴

人見るひや春門へ入る草　〃

色の色りつるやなりぬる牡丹　〃

牡若

十二

根ぬきの出るまつ松の木

つまを出て鄙にぬるる松　柳

たりなるあるやうまつる　碩

根ばかりの出るうちさ枝のもち
つまるところ京都さて如何つくさ 柳
なりなるものなるやうなるうちさ 碩
なりつくこと思ひ水を戒 牧
咲ものと思ふうちさ花ばかり
なりつくこと出るものいろ花 〃
まるまる芽間もいろいろ 〃
あるすることやしわきてなりさ 桂

京頃遠義善

うちつくこと神の見こと花 〃
やとあやしや水やうかまるさ 休
ひとまとりやうの枝のうちさ 碩
おなじ色や根ばかりの 〃
高ひまるのうちさ 〃

[illegible]

蓼 十三

苑 [illegible]

壁 [illegible]

[illegible] 祇

[illegible] 頃

[illegible] 牧

菖蒲 十四

苑 [illegible]

新撰ニモ入 [illegible] 祇

一句ハ [illegible] 菖蒲

壁 [illegible]

[illegible] 祇

葛蘭

十四

苑 常よみうり新聞にあり

新撰ニモ入 はつかもなりや新月の一枝つま

の雲の間よりみゆる葛蘭哉

壁 きよらなる花をみるもうれしき蘭哉

河辺れしなりとそ河辺れ 祇

夏のもふあやめもなきなりけり

春ひとり秋の雲かくす葛蘭

夕霧をあやめ葛蘭 ―

吟 あやめ草の新葉の間のあやめ草 ―

蓮にとなりあるこのおれあやめ草 ―

新葉をうり祝句を葛蘭うれ 柏

新葉をうり祝句を葛蘭うれ

はつかなる葛蘭の花の武 ―

はつかなる葛蘭の花河辺の郭 ―

あやめをうり祝句を葛蘭うれ ―

六月廿日に

新葉をうりあやめの新葉 頃

[illegible]の玉川菖蒲を　牧

川ちかくあそびやわらぎあやめ草　〃

菖蒲や昔しのばん人なしあやめ草　〃

あやめ草ふき用ひたる水の色　〃

六月六日の一回延善下望写句

独吟句百韻文を乗て

あやめ草とさしはの折のあやめ哉　休

菖蒲しくれたる葛蒲　養

ひく水やさそひ水のあやめ草　〃

[illegible]のあやめ草　〃

生ぬ根さしやあやめ草　〃

川流のあやめとしわるあひこれ　〃

[illegible]あやめ草　〃

[illegible]　巴

[illegible]あやめ哉　〃

[illegible]川へのあやめ草　〃

橋の音とのあやめ草　〃

川波乃あやめとわすれぬ白ひこそ
宵のまを水まくしたる為ぬまの
風ふかすなる蘆のあやめ　巴

書くふ水鳥乃あやめ哉
さくらゝ宿を河への菖蒲
橋乃音をいつ長井のあやめ哉
くすむしろ乃あやめをもとめぬ秋うゑ
長嘉年むしさきの新そ哉
みしらぬとなりの新そめあり
長を根に引をたゝ内ぬ河乃あや
人こゝろふ嘉年とあれ　嘉年
引のこゝろ人ゝあやめ哉
乃ゝあやの根あり長嘉

早苗

十二

中ごろの年とそ　とゝ猫
早苗より石竹かな　山とれそ

在さてわすれ草咲れす　紙

とゝのへさせて野山のうるをさ猫

行末の命へ　紙　時雨

○三句　ゆふ〳〵して民のあきしれ千とし　みそぶ
ゆふ秋さふ〳〵にそよくとがのまつ

山もたゝ木もむしたる人の心

すゝしきふ霧代　やまらとうさぎ

若なへを色なる男のもとに

行の雲とわり苗なひく門田哉

異国人市をとさゝせとゝ

人のわかさとしすをれ山界

大正田ふめきとりあゝさ蕉

うゝ雨ふなりひくや林の

野ゝ又先ふ〳〵ふ〳〵の赤の秋

秋風の雲ゝけをくさ人うれ

ふ〳〵ふ田秋風とけをうの松

如月ゝ紙ゝ蕉ゝ人ゝ金ゝ蕉ゝ　柏

わ門の下ゝ〳〵ふ〳〵ふ〳〵苗ゝ　頑

ゝつゝれ秋代山さゝ人ゝ花

野の草花うゑ置て秋の来る　〃
秋風の吹てうすきくさ人うゑ　〃
小田の中秋風とけぬ氷の花　〃

初秋の頃とおもふ人さくら　柏
わが門の小田の稲さ苗うゑ　頑
やつるれば秋の中さろくゝ花　〃
おりふしの雨の門田哉　〃
わすれぬ秋のもりのわさ　牧
雲の風ふかうゝ屋ふる田哉　〃
うゝ乃ゝ門ゝ行ゝ田哉　〃
田ゝ面ゝ秋ゝ行ゝ　〃
風ゝ吹ゝ波ゝ寄ゝ　〃
うゝふゝる秋ゝ哉ゝ　わて苗哉　庭

千句

うゝりゝなゝれ秋のいろゝ哉　休
少ゝ山ゝ里ゝ　山の河ゝ　〃
ゝれゝゝ家ゝ　ゝわけ草　春

あさくら家と桂ゝ家の事
秋元長朝ゝ竹田乃ゝ
ゝ
ゝ

行うゝ〳〵弥や新河山田なる
草とみまの云さるゝ人〻郡
うゝとゝ門田ゆきさ法ゝ
水蓮とす名あるなり此ゝ
志川ゝ名も徳もしるこの事
云ゝれゝ志ゝ法ゝうゝ
なゝ山ゝ法ゝひ名ゝ
一ゝゝ法ゝ法ゝ
うゝゝゝゝ法ゝ
四家ゝゝ法ゝ
うゝ四ゝ法ゝ
志ゝうゝゝ法ゝ
四ゝゝ法ゝ
いゝゝ法ゝ
ゝゝゝ法ゝ
生ゝゝ法ゝ
反ゝのゝ法ゝ

昌叱

薩摩国高屋山

秋のくるかとうたん雷雨　仍

青梅　十七

青梅は雨ふるうち　巴

六月雨　十七

青雨ふりあとの雨　敦

雨まこと宵のもりく　〃

ふりそそぐ宵をはらう雨の　左

はらはれの雨とふるう時雨　域

竹　なる雨の柳れいとなれて宵の雨　仍

夏引の糸くるう人　〃

芭　宵雨のあるさまに　伊賀

宵雨の小雨　光

新撰　宵雨を雲はなるの中道

国　長秋の伊勢物語の邪

竹

なを面の脚れいとなれて月のみ　明

反りの条てうへをたりあれば　〃

芭

宵月の面のあるさとひ　俳文

宵月の八ツ面の紙元文

新撰

宵月の三雲はるの出雲

国

長秋の伊勢物語の月

面とうとうふ所の書る宵月

ほうとれ八生嶽はるの三月

さうとれ三月の時月の

面あら　なりてと晴ぬ武

一秋のとさるか面はあるとも

壁

ほうとう素とれ雲りれぬ

て長月ふ所八宵月の柳

まれ三遊て正月の

面や所ふれとの宝　紙

下家もうとれかとの柳の郎　〃

海の所宵八海の月の素

一

雲をはらふあらし風
ちらすなれば沖の白波
青葉をしのぐ梢のあさみどり
みなれそめしかたちかな
青葉をしのぐ梢の色
青葉にかかる白雲
雲をはらふ風
みなれぬ色の雲
雲をはらふ風
青葉にかかる白雲
みなれの雲をなびく朝日
ちらす波を照らす
みなれの山を深し
青葉にかかる白雲
ちらすなれば沖の白波

さゝたれば雲あのつつみ伊駒山

雲間ふかき時雨
梢にかゝる白雲の雲
青葉もまじる雲

ながれの山を深しと詠ずれば
かすみの遠き海山もなし
ひとしれぬ山風にしたがひ
花のまり

〃
〃
〃

雲居ふかき空に時雨
梅ゝ山や雨の雲ゝ
世間も雲居ゝ世間
かすみたゝ月ゝ
ながめもこゝや空ゝ雨の雲の峯の雲
雨ゝ雲ゝ
〃
〃
〃

うすはあるかの月雨いくらなりとも　〃
六月雨や流つたるまま屋の松　〃
六月雨雲なきすは武蔵　休

南都にて

ひとすれいさかの川門の雨　〃
六月雨くさくさの雨井戸　〃

和泉守護所千句

六月雨こ郡と陸奥ちかし　〃
六月雨いかもしてのの霊棚　〃
ふみこまぬ神を池のこ屋藻　〃
六月雨こ屋やこ屋井るみ神の伝　〃
六月雨こくこ屋やうきこ屋の屋　〃
現つ石のひみこれ神こ屋　〃
こみこれ雲ゆくこ屋山雨　〃
これ雲こ屋ふこ屋の雨　〃
六月雨川ひるこ屋　巴
ふこれ雲こ屋水の根ひ　〃

有馬こうさやうきさらさの所
羽つるのはみるれば春もなし
さみだれ雲ぞうらうらの山路
〃

たれかまつのかさのなかさ
青葉の河ぞうるはの根ぞ
さみだれ雲ぞ水の根ぞ
有馬の里ともあるべし河へれ
有馬の松のさすがの水ぞ
はるさめ雲ぞ春の
はるさめ雲ぞ春の
みれば雲ぞ
はるれば雲ぞ
有馬の又通ふ河
さみだれ雲ぞ
有馬の
はるさめ雲ぞ
はるさめ雲ぞ
さみだれ雲ぞ
有馬の
〃

巴

〃
〃
〃

六月廿七日　雲井山張　〃
ゝゝれたるあるかはらの　藤子　〃
六月廿八日　雲井や　形張　中川　〃
六月廿九日　つゝ　ふしみ　〃
ゝゝれのあるを　浦　〃
六月晦日　雲井の　〃
六月廿日　のれる　青木　川　〃
はるばる　形の　ゝ　源私　〃
六月廿一日　のゝ　〃　〃
六月廿二日　や　都の　〃　河　〃
みれば　河　やゝ　〃　河　〃
六月廿三日　いる　〃　形　〃
さみゝれ　ゝ　〃　峰の　〃
六月廿四日　ゝ　神ふみ　〃　〃

ゝゝれを　測　源　〃
はゝゝ　ゝ　天　〃　〃
六月廿五日　原　〃　〃

六月廿日ごろ
さみだれの雲の峰の月
六月廿日のころ
ほのぼのと明ぬ
さみだれを測
ほのぼのと明ぬ
六月廿日ごろ
ほのぼのと明ぬ

越前国奥川

六月白川少将の山荘の七夕歌　〃

元康上洛のとき

六月白川の為ふさ法師都へ帰り　仍

六月白川日ぐすがたをかうしたる　〃

ひさしれぬ七夕ぞ　〃

六月白川雲井ふる法師　〃

ながしれぬ夢の世の中　〃

小田原の城内奥川

ひさしれぬ夢ぞ　〃

梅雨

十八

ながれ来る木の葉の風の梅雨　牧

ぬきてぬつる袖のうへの梅雨　〃

あめ人雲のうへは梅の花　林

ながのこりなれしむかしの面　巴

夏の月ひさしむかしの面　〃

樗

たてたる外面と引きたる内面と
面ともに上下共に井桁あり共
物所々に付て木あり孔祇
孔の内に一本宛の木
あり中央に一本宛の木
下に面と雲ふる孔樗
岸と云て八角形の武
道野に云て角あり
ちさえ人年に付ての長

為ともなりける〻〻
紫雲の色ともなるべきにはあらねど
雲にはあらぬものゆゑこうも
小雨もすぎたちれるにはあらぬ
朝戸あけて雲よりをるにはあらず 頌

菊屋道博様へ

みやまやはふかにはあらぬ延一
色ふかきみねの雲井にあらず 〃
なしくずしに雲にはあらず 〃
はるれば雲もこの一本のあるべし 〃
こもりさきの神の白金にはあらぬ 桂
雲とうたはれるのあるべし 〃
白や紅雲もあるにはあらず 休
こゝろを宿すにはあらぬ 〃

宗牧

月をもあるべし雲白かるべし 履
風吹くもはなをあらぬ 〃
雲をもあれば名残れば 〃

雲とうたれ記念れけるのあるかな 〃
面や九雲もしのあるかな 休
ちかを宿けふのうれしさ 〃

月とともあるうす雲白あるかな 履
梅咲て本性をのあるうれし 〃
春をしめたれ名なれ櫻哉 〃
櫻ちる春の本来あやくもしたる 巴
山ちれくもふれかりのうちる 〃
花ちるあるれ又あるうれ 〃
春をくれかふの午のうれ 〃
かさうて雲ち影のうれ 〃

憚

雄

憚やいとかのうち 文衣
ちかをれ本来を憚やを
世をたとを夕月ふ春を祇の郎 祇
憚乃ちをもの風 栢

[illegible] 頃
[illegible] 牧
[illegible] 〃
[illegible] 休
[illegible] 〃
[illegible] 〃
[illegible] 〃

[illegible] 叱

紅巴遊戯

[illegible] 仍

高合草 三

[illegible] 羅

[illegible] 〃

[illegible] 柘

[illegible] 牧

[illegible] 桂

新撰

[illegible]

蒲 五

[illegible] 祇

[illegible] 頌

[illegible] 牡
[illegible] 桂
[illegible] 〃
[illegible] 巴
[illegible] 〃

竹林

[illegible] 盛
[illegible] 〃
[illegible] 〃
[illegible] 〃
[illegible] 〃
[illegible] 〃
[illegible] 〃
[illegible] 〃

天保の生の初春おもちよりなる　〃
ちとせをみるあるこの行の千色ぞ　〃
ちとせの御生をよろこぶ成　〃

年をとかさねてやうやうの園の行　〃
千代を美在生をふるこの行　〃
ちとせすくふふうこの行の切緑　〃
なをもちとせあるこの行　〃
春をあかむふとつかむ若葉　〃
東門に行もひくるわの若葉　〃
今年生を思ひ行やせてなる　〃
朝顔とまをあるこの休の若葉　柳
一ふしふ千代やあるこの若葉の園舞　煩
東門ふ生をふ行やちよのとし　〃
月年をとあるこの若葉と憲の行　牧
あの行のさかや代の月の金　桂
天保十年十月二日新竜ぼく
生を御やまをひとあるこの園　休

江州石山寺の紫式部と
芳想ふこと共に月をも
松ふ作ることあるに十首 〃
新宅二階なりてあるに
あるに生ずるなりや意味 〃
酒あるに
わが世とて行のくるる家路 〃
祈禱千年
いくとせ生ずる行ふ新の松 〃
千代ぞかはらぬ高砂の園の春
なほ春ぞとの色なれ世を不 〃
今年生ずるまでなる園の竹 〃
七年生ぞ作りし松の上の花 〃
今年生ずや風も動の竹

わが緑とそんなるつくり竹 巴
発そうしけりとも竹やの竹 〃
生ずるこの六歳なる竹 〃

今年生や其ゆえと園の行　〃
ゆえ生れ出ぬ松の上葉哉　〃
今年生や風も動かぬその行

巴

わの緑そよん根ゆるしそのうち行　巴
花そよそよ行くとゞ花やの行　〃
ゆくゆく歳ゆくとゞ年の年　〃
庵の中乃蓮と夏の年　〃
面白ゆすゝ面白ゆすゝ年の年　〃
年の年や年忘なれの年　〃
千歳の御陰見えもうるる年　〃
ゆくゆくゆくれや園乃行　〃
云年生ゆて行て今年ゆく秋れ　〃
年ゆく小千世ゆふ行ゆる年　也
ゆくゆく生れやゆくよゝゆる園乃　〃
雲ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ　〃
東福寺茂長老ゆて和漢　〃
今年生ゆゆゆゆゆゆ行　〃

紅色短冊

わすれ草ゆかりの色とかりそめに　紀

雲

竹林

風ふかぬ雲にまがへる花の色　桂

妹

ちるものとのみ見し秋の雪なれば　紙

雲ゆえ軒ばの月のあらはれて　〃

雲ふかき山の端ゆ雲の立　〃

むらさめ雲の引き渡るか　柳

風ふきぬ雲の海ふかうるの断る　牧

あらしふきみなる雲の雲　〃

とよかの雲のいそ湯の　〃

短冊

なげしの水清み　寺屋葉　桂

雨晴れわたる夏の雲　〃

月雲井にすむ月秋　〃

あらためて
とかくのれてくる
過ぎて

なかなか清水寺に参る　桂
西軒から伝言めしこうまる　〃
川崎雲井より六月末　〃
明家より記事　休

永京十四日

少しかけたみの義　〃
風邪ひいて面白くなれば不　春
まれて月末とも松ヶ丘　〃
もしくはもの現ると　〃
十月廿日より比義　〃
とも所あるまれ　〃
少しは出る家も出来　巴
元来十月廿日より出河　〃
新しれをみて行く　〃

〃　〃　〃　

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]門田[illegible]柳[illegible]
天の戸[illegible]
水鶏なくなる[illegible]水鶏の[illegible]
水鶏啼[illegible]
[illegible]啼[illegible]
月のさす[illegible]
水鶏なく[illegible]朝戸[illegible]
天の戸[illegible]月[illegible]水鶏哉

中務卿[illegible]水[illegible]

あけぬるまつ[illegible]水鶏[illegible]
[illegible]月[illegible]水鶏
[illegible]月や[illegible]門柳[illegible]
[illegible]水[illegible]水鶏
水鶏啼[illegible]

祇
〃
〃
〃

ゑの礼帰月や花の門柳ゆ　頃
見つゝ水すゝ花もなき業　〃
水鶏帰月夢の所ゑて寂　〃

秋の戸や水鶏ゆ行けるあきの雨　〃
水鶏帰秋たゝうて秋の朔戸哉　宗牧
暮月天の川とゆ井なるれ　牧
まれ帰て松の戸ちぬ水鶏　〃
契人ゑゑな水鶏の小夜中庵　〃
寝の秋ゑ水鶏ゆ乃ち年間　〃
ゆ鶏帰と月行すかの水鶏　〃
水ゑ山行この乙むの水鶏哉　牧
百ゑの戸ゆ月ゑ山ゑる所鶏　〃
ゑ松ゑ松の戸行ゑの水鶏　〃
暮ゑ月ゑ寝ゑ人ゑ松ゑ　〃
天の戸ゑゑ雨ゑ水鶏ゑ　巴
水鶏ゑゑゑゑゑ法の戸ゑ　〃

氷室 六月

祇園社 〃

外ヶ濱 〃

美濃 〃

水室 〃

水室山 〃

水室山 〃

水室山

本間七郎殿へ賀状　〃
きのふは春の杖の祝　巴
今朝は先づ海松　〃
陽之助殿へ同　〃
水仙　〃

二日

天つ乙女たちの水宮　〃
春の杖の水宮　叱
夜の門の越路の水宮　仍

海松

山松のうきみるめ　祇
石崎殿へ
吹風の海松の深し　柏
深しらやちらめの木の間　頂
わたつみのひろひ有海松　牧
志賀の浦の海松　桂

清緑の岸の柳の又海あり川のうミ　仲
和田浦にて　　〃
あまつ人の釣する舟の浦こぎ　　類
河原の末葉の又の根松　　〃
刈ほすとて又の沒の上の紙ひき　　比

夕立

作

夕くれの雨の降度なるに　　歌
雲こそ見ぬ夕立の雨　　〃
白雨の降ぬる時の夜の雨　　〃
流星の光夕立　　〃
あめつちの星は夕立の雲　　〃
星わりて白雨の間を雲ぬ　　〃
白雨の風や夕立の岑松　　〃
白雨の霧のきぬ風の下川　　〃
夕立の所本の家の天川　　〃
白雨の又の山の家の松　　〃

あめつちをさかりにけりと山岸を　〃
里わたる白雲の川き岩ねをこ　〃
ケむるまを風やゝ〻の川岸ねに松　〃
白雲の霧のあきむしをの風のまに　〃
夕ゝ所本ゝ来ゝ天の川を　〃
白雲の又ゝ出ゝ来ゝ天ゝ　〃
白雲やこゝ元しゝ波天ゝ　〃

越中國にて

白雲の新河ゝ来ゝ　〃

雲間乃不ゝ

山ゝゝあゝ出ゝ山のゝ義　〃
白雲ゝ出ゝ来ゝ山ゝ岩ゝ雲　〃
吹むゝ来ゝ夕ゝ松の響　稲
白雲乃来ゝ海ゝ　〃
ゝの来ゝ夕ゝ来ゝ海ゝ　〃
来ゝ来ゝ夕ゝ来ゝ　〃
白雲の夕ゝ来ゝ　〃

白雲とあるを山の端に出る　〃
月をちらす夕立にて玉ゐる　〃
引ゆくやいつく夕立の雲　桂
白雲やあれのわれ面のうら紫　休

お伝ゆ寺にて

夏いりて夕立ゆく河原風　〃
水無月はいつく夕立河ゆく風　報
夕立の霧とまさしきあはれ思ひ　〃
夕立の雲ゆきもむきこそ武　〃
面白ゆく見風も夕立小薄　〃
白雲とあるをうらふかわる風を孔し　巴
夕立やたゝ空加茂屋敷川　〃
ゆく雲ハ白雲れ沈のさ前れ　〃
白雲も月白の雲井れ　〃
江の子ゆ見ゆ夕立二雲ゆ　〃
沙風や中をりまつわらす星　〃
白雲のれ[illegible]やゆ[illegible]れ　〃

夕ぐれや雨かぜ加へ侍る庭の門
〃
まつ秋ハ白露れ沢のさ苗れ
〃
白雲もまた月雲の重井れ
〃
江のうらに見しうらの夕なぎ
〃
沖風やゆきもりまわけうす雪
〃
白雲のれうらかやこれもきれ野
〃
うらうらとつゝや夕月雲ほを
〃
白雲ふうきたの思ひたるし
〃
夕ぐれのまぶかなくふれ
〃
白雲ふこれこそ花をもれる秋
〃
夕ぐれのしらしらまを神なく夜
〃
夕ぐれはとかちめきを思神と臣
〃
夕ぐれのあまぐもは雲ひかる
〃
夕ぐれのこゝふ水ゆくこゝをうれ也
〃
夕ぐれやこゝをしかくうれ凡
〃
白雲やうゝふゝそるみをれ
〃
吹こゝ秋くれなゝやゆ女川瀑風
〃

お医師

[illegible] 仍

赤橋氏 十二

[illegible] 紙

[illegible] 叱

麻 十三

[illegible] 紙

[illegible]

新撰作こき入れ

桜子 十四

[illegible]

桜子のあさうかれ [illegible] 紙

桜子の [illegible] 〃

なでしこのあひさき [illegible] 〃

[illegible] 拍

梅子

十四

新撰作こき入

山桜ちりなてしこそけるいとゝ
梅子のあさうかりしの名　祇

梅子二番しぼうとすきこそ　〃
なてしこのあひさきぬれ　〃
雨のうちふるや梅子の青ぬり　柏
梅子のようさうこそ出わる　頂
梅子やうこゝあるに又所有　休
梅子の種をいとて宵月の　猿
つゝてこれをあてしかの青　巴
梅子のたよい年ゆ石ぬる　〃
梅子の宮ふ志る天ゝて　心

紅巴遠子長

ゝゝ知て身をあてしかの梅　仍

石竹

十五

これをゝ屋ゝ屋ゝ屋ゝ行

苔むす岩の根元に　石行　張
散るはやいとあわれなる　〃
末永世にはれはいしの　休　〃
実わかあるまれなる　〃
ちとあれば玉あるまれ　石牛　牧
松やいまも苔むしてはれる　石の弁　桂
いふんあるまいしの　休
あるをもとめるやすいの　石行　養
苔あれば年の経りの　〃
年をはるとはるる　〃
白くはるるを　石行　〃
花は春やの　石行　〃
岩に生ずる　石弁　紀巴
常にあるやといし　巴
あるとあるやあれば　石行　〃

常夏　十六

あるものやいとあるの花
神ちまとこるやいとの　張

[illegible] 巴

[illegible] 〃

[illegible] 〃

常夏 十六

[illegible] 紙

[illegible] 〃

[illegible] 〃

[illegible] 〃

夕顔

十七

夕ゝ行く方門や出たりき　柳
夕顔のまゝにとりや玉ゝれ　牧
露ゝ夕ゝ出ぬ多き雨ゝれ　穂
夕ゝ行や入ぬ人ゝ出ぬ家の　〃
思ふ人ゝ夕ゝの色ゝ　〃
夕ゝ行の時ゝ出ぬ　〃
出ゝ行の方ゝ月の出ゝ　巴

蓮

十八

下水ゝ出ぬ池のゝ出ぬ
ゝゝ出ぬ蓮ゝ出ぬ　張
露ゝ出ぬ蓮ゝ出ぬ　〃
思ふ人ゝ蓮ゝ出ぬ　〃
行の動ゝ出ぬ蓮ゝ出ぬ　玉ゝれ　〃
蓮ゝと行ゝ出ぬ　〃
名号の蓮音作ゝ

紙

〃

〃

〃

玉ちるとも玉ぬきかけてたゆたはぬ　〃

かりてとよ月のかつらあふ菊とかは　〃

霧ふかう月ぬきかけてたゆたはぬ　〃

月のうへに霧ぬきかけたゆたはぬ　巴

霧とかりてとよ月と毎夜ぬ菊とかは　〃

きてしらぬ中とむすん霧ぬきかけたゆたはぬ　〃

月ぬきかけとまきてしぬ菊うれ　吃

けてそれの立てとよ寺の鐘とかは　〃

ちりぬ中ぬ霧ぬきかけたゆたはぬ　仍

お大師流御筆池の蓮の花うち

いてしらしてこちらの紙に菊の花　〃

扇 十九

月ぬきかけてそれを東ちとう扇に

神ぬきやゆゆしとりとゆるあふぎ八

萩をしき扇をうれ月ぬきかけたゆたはぬ　祇

風ぬきて扇にうつりて萩の雪　〃

萩をしき扇をうつりてうつりの風　〃

扇 十九

神いまやゆふとりとそふるあふさきに

扇

萩をよめる　扇をうちふれば風もなし　祇

風をよめる　萩の葉の露　〃

萩をよめる　扇ならぬひきの風　〃

月をよめる　扇のひろうれ　〃

雨をよめる　扇なく天つ風　〃

月をよめる　扇をうちふれ　〃

月をよめる　扇をうちふれ　〃

月をよめる　扇をうちふれ

扇

ほうしをあふぎとうすきをあふぎ
神のふねとうすきをあふぎ
とうすきをあふぎとうすきをあふぎ
うすきをあふぎとうすきをあふぎ
それはうぬ山吉ふぎれ絵ぬ
むしろ家扇吉ぬ朝ぬ
扇をもおもやぬ朝ぬ
秋ぬと神をうまる扇ぬ
まつ風の月ふぬ扇ぬ
きくやぬふぬ扇ぬ二重ぬ 柏

摂州ぬ名寺 稱名寺 ぬ

天 天保四年七月十日号年に

出き白ぬ扇ぬや 秋ぬ

きぬの月山のぬ明ぬ 頃

ぬ神ぬふぬ扇ぬ

ぬ世ぬ扇ぬ

天保五年　天　四月十五日寺中に
出き申候扇風や　外　松ヶ
〃

春さの月山のさくらの時分　頃
さく様しと云ふふうきの扇子　〃
春さ山わひ侍る時分の扇子　〃
なつ出て山の新緑の時分扇　〃
秋の雪外神ふうの扇子　牧
秋風のうちひちの時分扇　〃
時の時分神としの時分　〃
冬さ月と雪ちる扇子　〃
冬さ風吹こうこの扇子　〃
時ふく雪いあのきの雪井扇　桂
秋風のうちひちの時分　〃
風のいろ雪井よみの扇　〃
時ありてのこと扇子　〃
春さ山のこと扇子　〃

扇

ひさくまつ月雪折く扇うち　〃
ちかひをこめし扇や　〃　天津風　〃
月もしらしらとわたる扇哉　〃
能狂言にたく絵巻に人無り
五のうちうすくれなゐの扇哉　休
但馬流上洛去年中国のとし
長行人数多まして一書
風と雪ことうともちる扇うた　〃
千日
ちかひをこめし扇哉　〃
ちるとゆふ風とまもる扇哉　春
扇うち月雪風のうちうれ　〃
月雪と山のとうとうる哉　〃
山とうつる月雪の扇哉　〃
絵ゆふ雪風竜ちる人白扇ぶら　〃
持ゆふ風のうつる扇哉　〃
少ゆふ雪風十面ちるあ扇哉　〃

扇に月と秋風のうかれ
月ぬけて山のこゑあらぬ秋
山と海と月とのうつの扇哉

絵かける唐土人の扇ぐ
杖ふる風のうしろ姿なり扇哉
少ふく夕風の西にはるあり
扇をもつもやうや天満風

神のうらふかるる風の扇哉
小雪も見えぬ山ぶしの扇哉
あをぎをもつ風くるくるとして
四つ角に吹風ぬるる扇哉
風あれて雪ちらへわるる扇哉
涼しさは風の色なる扇哉
ありあるる風ぬるとなる扇哉

納涼

雨ぬるる長ぬ三つ三ぬ孔蘆

遊涼しさの家の雅言　乃
夕涼し滝とんの心乃松　胡
涼しさ沢こゑ乃亀乃子　千代　和
新蔡
秋風乃音神乃なかの雅涼
体乃て涼む滝乃山路哉
高とも乃忘すき乃涼　胡青
こゝと乃涼さこゝ乃世界　張
俊
乃こゝ乃ゝ乃高涼　めの乃
乃ゝ乃ゝ乃高こゝ乃ゝ乃　武
新撰
乃涼　乃乃ゝ乃ゝ　小林　〃　〃
吟乃松乃ゝ乃ゝ乃ゝ　秋乃風　〃　〃
乃乃とゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　乃ゝ　張
涼しさ乃ゝ乃高涼　胡　〃　〃
高乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　〃　〃
秋乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　松　〃
松乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　〃　〃
乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　涼　〃

[illegible]と[illegible]あしやとうん[illegible]遊　祇

[illegible]しうそめる岩源　朝[illegible]

[illegible]やなれ[illegible]屋敷　岩松

松ふる[illegible]　〃

なくなる[illegible]　〃

[illegible]の[illegible]　〃

源[illegible]　〃

[illegible]　〃

[illegible]　〃

けん涼し　格子のきれたるの窓　〃

紀伊國小松原人の所也

かさ涼し　松ちかうきこえもしの原　〃

ゐ紀さの島　山の名

かさの涼し　河風涼し　昆の松　〃

越後國名所　まつ

けん涼　峯雪沢汀のあきすゝ　〃

雪涼　浪入てよせてもしまれば　〃

涼れ〳〵　山風もそこはまとのゆ　〃

けん涼し　ゝれ見れば　〃

ひえの山　山の名　〃

かさ涼し　峯の夜もしら波の松　〃

けん涼し　山りかさるる影のまち　〃

けん涼し　こけの雲ひき遊の松　〃

千野文庫文屋綱秀編

けん涼し　むしの風乃中とれもん　〃

けん涼し　格子のきゝ中とれ松　〃

かぜ吹て　岸の松風　波の松　〃
けふ来て　山ゝかさなる　初のまつ　〃
けふ来て　こけむす岩　遠の松　〃

千載和歌集　文屋康秀

けふ来しも　こゝ風ふかせ　給へれ　〃
けふ来て　始めてきゝし　中そ花　〃
けふ来て　風ふきこゝに　玉をれ　〃
やまとの国　初夕ぜ　こゝ風ふく　〃
山沢遠の　朋夕すゝん　風の色　〃
みゆるかの　石けふ来　こけの遠　〃
遠来て　こゝ花生ふれ　深みとり　〃
来て　こゝ吹ふく　松の夏　〃
風やこゝ　思ひの松　こゝ夏　〃
すゝしき風　秋のうちなれ　〃
朋山　みゆる山風　中の夏　〃
家ゆゝ　毛花ゝ　この夕ぜ　〃
山人家　ふる家　秋の夕ぜ　〃

秋の夜の風もかすかに吹きて源氏

月をいづくに秋をかぎるべき松の風

松ならぬこの秋の夕べ哉 〃

井手のわたりの

神のゝしるしの水源し井手の里 柏

羽衣の天つ風 〃

菊原の四條亭にて源天つ風

乃至月のいづくにかくれぬ源氏

摂州原の山中 平元信館代

あるべきかの源し みゝ風 〃

桐の葉ふる雨秋や下源 〃

住吉社法楽

こゝろをもて松の葉源し真風 〃

山の人の今宵

陽もかすかにて源氏

源氏の紙の長

山ちかくかすかにて水夕源氏 頃

住吉社法楽百

こゝろをもて松のをの原に真風

ふかの人の命とゝ

陸奥の国にて原に高原

原にて紅の濃き水を求長

山ちかくかけてを水夕原を頃

波をあらみやどりもとめて原を

原にはわらこんの人の用の風

山の端やこゝろあるかぜを

東屋波をあらを原に遊の松

君のみかすきを松のをを原を

原にさやなりしに松の陰をうゝ

海辺にて

やもり船のひさを原に浪ぬ

以原はあらを原に花の松

月人をまちかね下原を

志のさを年にうゝ風をうゝ夕原を

八重生の高砂原に大の風
それとかやとは見えし源氏の
源氏は高砂の
山源氏は高砂の山のをうえ
そてや花やちきさくらの下源氏
見えしは花の庭の松
源氏は月はもの朝ぼらけ
月もとしけ山はちは八重桜
ひきやを毎河たちは高松
源氏は少なりの松の雪
明石は天の原乃浦
神や紅葉は高松
又や秋は平宮高松
風は川と家とは
源氏は山の

又や秋うて平て高ゝ如ゝて　桂

風川に家にて見しさまた

深川の山のてもて秋しと

[illegible]

[illegible]

月やしらふ元をむ秋の夕深と

深川や天津元をを乃風

なんと照日も

日もさらにすふく峯の風哉

天満宮

神風となれる深川在の松　休

神殿宗鑑の人不京

なんと花も色ありて深川　神殿川

風月のこゝろもて松はなを深

元長ゝ孫ん深の水へ　春

やゝ花ゝ村ゝ春ん元長

野のなゝ変のゝ深の海哉

深ゝ紙元ゝ其はは春

山ゝやゝひむ京元の風

原

山あらしのはげしき夜は水鶏
神ぶるいする沖の波濤
夕ぐれのさびしさにたへずして
初しぐれの雨ふりそめぬ
山寺の門をたたくこゑ
山ぶみの人の行かよひ
木枯のはげしく寒き海岸
名ゐの河原の秋の夕べ
河風やこゑあれ野の芒
梅のさかりの秋の風
山ゆけばのの高瀬の河原風　巴

影すゝし月やほり江のたまかしハ
散るもあるべしやなぎ風の雲
河風の吹きて涼しき夕べ

涼しさやなびき流れる河の
涼しさの底にむすぶ柳かな
涼しさやほの白き道

影すゝし目やぼり江の玉かしハ

散うせぬ秋やとすゝし夕風の生

河風の色に涼しうなれ

涼しさ

涼しさ

涼しさ

源ーさん仮ーとれば
ちゃーさとるーを拾はせとるとる
すーさんれとるるゆるる
源ーさまれとるるるる
立ちるる屋いこれるるるるる
立ちるるるるるるるを拾う事
源ーさんとるるるるるるる
ちるるさとるるるるる
ゆるるるるいる源ーさまるるる
あるる目やるるるるる
源ーさやるるるるる河原風
すーさるるるるる
源ーさんるるるの子孫
源ーさるるるるる

源ーさんるるるの
さるる源むるれるるるる
山ゆるるるる源ーさる

すしさをつりうを下れる舟
源しまの中ゆ見るけの子孫
源しまの中ゆ見れば

源しまの川ゆ流る松
さを源むしまれとをうと松風
山ゆとせうと源ゆ春の布
源しまの松下今見宿川
をうを見ゆをしまの松
をとしけうを渡の河長
源しまの中ゆ見れば小松を
風まを宿乃中未松家の風
川舟をせう待つ源しまの松の変

板谷天満宮

をしまを屋を久方比屋
けをを風吹れやを出れ下出て
源しまの中ゆ見れば秋の
年をを人の松乃下源を

源

[illegible]

[illegible]

[illegible]

信吉會不寿真翁奉敬

秀頼公御代

ものしれぬ世の中哉

昌琢真りけり

延尾ふ寄ゝ遊の門ゝ

ゝゝ繁れる涼しさ

紙色病中吟 仲真

あつさをふる涼しさ

すしこそ秋の

新撰

夏

廿一

夏とゝの月ゝ川みゝ久

蓮

ゝれ元のゝとゝ泉

蛙

寄ゝさえ

下ニ家ありて泉屋の門 稚
門前に泉やあり松樹 〃
庭ニ小池を穿ち水を導 〃
平面を流し泉水 〃
を造り今面白 〃
松と共に庭を飾り 〃

巖鴻庵

滿ちあふれて大いなる 〃
泉河の如くして
むしろ数人を座せん 柘河
ほど水を湛ふ
如きちいさき川に柳 〃
風ふき蓮ふ 項
賀川波作公園

ゆきちる桜川に比る柳　〃

風の音に萩の露ちる泉石　頃

賀茂別雷社歌合

石そそぐ谷川のうつる波ぬき　〃

うつるとも清き泉の底の月　〃

夏の月やどる泉の水　牧

ながめつる夜ふけぬれば泉水　〃

松の色に雪ふりかかる　〃

夫木　玉泉　月やどる川ぞこ　桂

月やどる泉の水　〃

風なびく川ぞこ　〃

山桜とうつる色ぞ川ぞこ　〃

清石　わたる泉の花　巴

海底　一度の泉の水鏡　〃

海ふかれ　泉石　〃

とぬ山をうつる底の清遊の川ぞこ　〃

ふかく出る泉の川ぞこ　〃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

竹

頃

紙

杉風ふ世をうて涼し岩清水
〃
いそ井にうつるあるて
うつるかをんを花ふ志水に布柳
すゝしき吉源やきうる宿巴水頃
絵師久の代いまゝ水乃庭ふ水巴
奥ゝ入ゝ絵とゝ北清水ふ
〃
りと生ゝちゝ巴と絵ゝ志水武
〃
絵ものゝ人へやゝ志水柳ゝ
〃
源ゝ清ゝゝ水ふ
〃
ゝ清ゝ絵ふ
〃
絵ひゝゝ人へゝ志ゝ
〃
ゝ絵ゝ
〃
ゝ絵ゝ
〃
ゝ絵

家にて紙とる庭に秋の水　〃
けふもまた杉ひとよりは志賀　〃
なかの日に絵入て水の水流る　〃

海人の釣舟こぎ寄る志賀の浦　〃
とまる舟入り日の海に清水流る　七
絵かきやこのうみかぜ岩屋の　〃

秋

廿三

雲ぬけて月もとまらぬ秋の河　紙
金もとまらぬつゆの手をとる河　〃
秋出て月いとまなく秋の色　〃
松とふるものとなる風の秋　〃
思ふ事とまらぬ秋の河　〃
河秋にてなる心のわたるなる　〃
正秋門にいたる立てあきたる　〃
立て毎に秋移と知ることを河　〃
きてみて秋の今夕　頃

海ちゃ浦の船頭へ申あはせ出船
仕て居たれば中ノ義兵衛殿
申人衆出船なれば船の中へ
年ごろの内ちゃ年みなる内
何ぞて私の小ゆへ又なる川
とたれ流ん

性

吟滝ちゃ不ノ海員書

かゆ春や杜ふかな百姓はなる川
ケ年ごろ年毎ケ月ノ月ふの月ふ

体
養

桜麻の内ちゃ年なる
いきや関ケ月や浦ふ月ふ

巳

ケ月ちゃ先ケ月なる月ふ
ケ月ちゃ浦船ケ月ふ
いきなる年ちゃ乃御殿

年ふ毎ケ月ふ殿ちゃ
ちゃ年ちゃ乃みなる川
ケ月麻ちゃ年の月ふ

年ふるまゝに山路はたゆる紙川
〃
うゝたゝんとやしらんみなき川
〃
ひとゝ春やゆくらん花の山
〃
流れてなを見ぬ人ぞ春川
〃
深しとや山路のくれぬ井の水
〃

紅色一四是遠長寿十六歳
年暮やかたむく外の山の水
〃
流れゆく秋のさびしやみなと河
〃

雜夏 廿四

ほのぬれ袖ゆ中しきあつ人の郎
きしてうゝ影や秋の柳蔭
さゝ西七 西八 思ひうゝ夏は日ゆ分
云ゝ多人ゝ春ゝ滝山ゝ不ゝ行ゝ

為氏朝臣

菅ノ根ノ咲ヲ見ルトテ

〃

〃

〃

行き暮て柳ちる清水
〃
夏ゆゑ水のもとすゝ
〃
柳の色て蓋もとこれ夏哉
〃

越の國へ行とて

〃
かりそめに三年ぞ経ぬ
〃
立とゝまれとうれしかるらん
〃
白ちさとうまれて
〃
富士のゝ雪ゆきけぬ
〃
夏とゆきかよふ
〃
とりの羽
〃
とりもいとゝ
〃
月と日とをかぞへ
〃
行とて月日ぞ
〃
ふるさとの池の
〃
備中國にて
〃
海ものゝ
〃
世をとはゝ
〃
月水をこそ
〃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

竹の葉の白ゆきをとゝ弥まさり
ゆくすゑのいとたのもしき一日かな
毎日真房詠常て

六月乃ふてゝ

ゆくすゑの末は菊とゝ
富士乃山ふたゝ小
きえぬ雪一つゝ
水口のやうしゝ
三條ゆやなれ若草
しゝ秋の長雨柏頃
あるゝ夕日哉
春ゝ乃ゝ
なれ州ゝ
桐のゝ
秋百ゝ
文ゝ

都も秋の夕暮せしかは
めるこゝろ分ふ雁の秋以ものこゝろ愛
ものもうしいそ里秋のつゆ
ほ寸こてゝとゝ雲月はなのうへ秋
さそへ水せはうきちよの花もなし

宗碩追悼

うしろ姿のあふ者ゝ言ふ
夕浪ふかれすもれたる風
ゝ所の色やいろ和月の色葉 江葉 桂
松や年ゝ去ゝ相ゝ砌ゝ
ゝゝゝ天ゝ風
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ

反表うゝ風し紙さ雑戸分
秋とう月うつとやとるう巻枕屋
雨や日数ちかこれこうう山屋分

面をやこゝおのみるうこ片つきこ
浪のうやかゝ花わるう清こ反らを
この陰をかや千世ふ八年椿
明かをこゝやめうこ紙し八
椎の実乃らゝあるみうか
落こう反秋こ月もふこ日
をこれうを月こ日この面
澄やけこをこうをとうを花面
庭の面の高所外ふるを祈れ
風と外けを反なれなのう
こう秋とをこのうこ反こを秋
若葉りうれをしまわふ行ふ
庭の歌やめうこをこ山戸山
歌ちうを風と去すうのわこ秋

休

法隆寺にて

立てまれてうつやかみまとり抑け

永原千句之内のる

本の間やさしもしらぬ夏の雨

ムしのまもれ面白ものかな

夏のいろ月雨ふるまわるく秋の

病のうちにて法華の一杯ふ

夏の色やあるてとうもるるかの夢

形ちや雲井のそれ間ちかく

天神名号法樂ゑ

あ月日ふみやそれまの六月ふ

うすあやかをへて千人夏こそ　春

深山木をそこりて言ふ

夏ふしをそこりてうつ

疾病

うすゐやなどして十八夜こゝに　巻

深山木をこゝにうゑ置

こゝにこゝにこゝにこ

一ふかれ申ものふかぬ　〃

お天王寺

うちつけにやとのうつり　〃

ちりぬるをくもんこうにたれ　〃

おもかげ　〃

お大坂

あきかぜや神田川とは　〃

萩ちるや水はあふれて　〃

玉ぐしの春ぞ忘れぬ　〃

鄙ぶりの　〃

おくせもなくやもしぼの秋　〃

もろこしの水あふれぬ　〃

ゆく河や梅ノ夕わち　〃

ちりの家ぬしの　〃

お美面

たかい山ふかい山ふかい　〃

病ふかい中の病とか　〃

毛ものゝ水ゝ
ゆゝ面つ河原や梅ノ夕わち
ゝりの家ゝ山ゝ　ゆゝち　数の水

書簡

たゞ川ゝ家ゝ家ゝ
病ゝ乃ゝ本ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

書簡別

ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

みちのくに秋を感ずる春の霞　〃

雲のみかすみ　於天王寺

志賀別

立ちそめて　いれそめにける秋の夢　〃

うたかたの　ふるさと生駒山　〃

芋の葉を

お茶別

立のぼる　あの紅葉の　ゆくえ　〃

なれの目や　ゆくすえ千年　佛の松　〃

寺巡りて　酒山ちの　ひきのこ　〃

こゆい　雨りわたる　ものと　〃

いりくもる　こ　〃

六月や　〃

かぜ　〃

芋の　〃

芋の　〃

月弱の　〃

中ふ　〃

夏の　〃

かぜ吹ぬれば夕べの浪ぞたつ　〃
草のまくらや荻の葉もそよぐ　〃
夜寒なれば蟋蟀ふかくなき深ぬる　〃

月前の秋を物がたりする　〃
中ぶらりんの秋をたのしむ　〃
夏の秋と云ふ物あり相生ひ　〃
海山を隔てしかや小川いとく　〃
水とたまる涙の流れ　〃
夏の夕日山の端にいるかな　〃
夏やこの年月一度の逢瀬か　〃
なかれ山の清らかなる　〃
川水と共や清きの柳　〃
水晶のかさあるなるべし　〃
夏のうたかたのうつろ　〃
夏ぶしやうき世をいとう深山ぶし　〃
あれ夏やこそ小水そそぐ夏の山　〃
夏ぶしやこそ世をいとう　〃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六月廿七日　仕ちやうで座敷
秋の夕ぐれてこのて高う酒の時　七
酒ちやうこの高きやうなるやうな
　　〃

夏の日ながしこれの石の井戸
秋ちかしあるやうなる秋の夕ぐれ
ちりてこんこ世やまりひわとれる
六月廿七日の下ぶ高きこ　仍
　　〃
紙色追善
六月廿七日　〃
　　〃
法華追善
たのもしあるの日行ひの
　　〃
紙色六月三回忌
蓮生法師の三代をもつの法華
　　〃
お大師
五つの日を以て紙の行事

お行幸四月九日稲荷殿
ゑとをや乳をとをゝ